

隅田川散歩 (六) 佃島から河口まで

長尾 進一郎

隅田川の起点である北区の岩淵水門から、下流に向けて歩いて来た。永代橋の下流正面に控える陸地が佃島で、隅田川はこれを挟んで二手に分かれる。右側が隅田川の本流、左側は派川で晴海運河に繋がる。佃島は元々河口に出来た三角州であったが、その後の埋立てで現在の月島等の町と繋がった。「佃島」の由来は、本能寺の変を聞き堺から岡崎へ戻る途中の徳川家康に、摂津佃村の漁民が舟を提供し助けたことから、後に家康に招かれて江戸に移住し、郷里の名を島に付けたとされる。江戸名物の佃煮の発祥地で、佃煮の看板を掲げた歴史ある店が残っている。その一方でタワーマンションが林立し、新旧が混在する街でもある。

隅田川の本流が佃島と出会って最初の橋が中央大橋。平成五年にできた近代的な斜張橋が威容を誇っている。右岸に、日本の標高(東京湾の平均海面からの高さ)の基準となった「霊岸島水準点」がある。亀島川が合流して次の橋が佃大橋。対岸の明石町との間にあった佃の渡しは、隅田川最後の渡し船であったが、昭和三九年に佃大橋の完成によって廃止された。

佃大橋から勝鬨橋に向かう途中に「河口まで一キロメートル」の石柱が立っており、この散歩もいよいよ終点に近づいてきた。勝鬨橋は背の高い船を通せるように中央部が八の字に開くことで有名だったが、昭和四五年から「開かずの橋」となった。

上流から数えて二六番目、隅田川で一番下流の築地大橋に来た。平成三〇年建造の、隅田川で最も新しい橋である。右岸のたもとに築地市場の跡地が広がる。貨車の線路に沿って弧を描いていた特徴的な屋根も今は無く、平成三〇年一〇月に八三年の歴史を閉じ、南東に二キロメートル余り離れた豊洲市場に移転した。

築地大橋の下流、右岸の浜離宮または竹芝棧橋の前あたりが隅田川の河口と思われる。都心の人口密集地を貫いて流れる隅田川は、長さは短いながら、他の川にも増して人々の生活や文化に密着した川であることを実感した旅であった。(おわり)